

# シニア世代からダイバーシティ社会に思う



清水 洋

信州大学アクア・リジネレーション機構／  
奈良先端科学技術大学院大学マテリアル研究ブ  
ラットフォームセンター  
[380-8553]長野市若里4-17-1／[630-0192]生駒市  
高山町8916-5  
専任教授／客員教授、工学博士。

専門は液晶、有機・高分子電子材料。

この年齢となり（ゴールド会員）、ダイバーシティ委員会委員を仰せつかった。「こんな爺イでもよろしいのでしょうか？」こんな言葉がお声がけいただいた委員長の先生に思わず口から出た。これもダイバーシティのこと、若い世代、中堅世代といろいろ交わることには意味があるとの思いもあり、年寄りの冷や水にならぬようにと心に決めてお引き受けした。今般、会誌高分子の「仕事と私事」に一筆書くようにとのことでこれも戸惑いつつもお引き受けした。

さて、「私事と仕事」と今回の「仕事と私事」、順番が逆転だが視点がどちらに軸足を置くかで発想は異なる。もちろん、今回は後者であり、仕事を進める自分が私事とどのように付き合ったかを書けば良いのだろう。現役時代、仕事に関してこれからのことに対する期待感をもって生活する空間と時間とを過ごしている間は、前を向いて何かをやろうとする時、いろいろやりくりが必要となってくる。研究のようにやりたい仕事である場合、それに集中したい時はいろいろなことが「うざい」話となりかねない。ダイバーシティという世界観ではものの見方としてこの「うざい」感を下げるに繋がるだろうか？

最近のダイバーシティ推進の方向性がこの多様な世界に社会的許容性を育むという流れと認識すると、職場や家族や友人などといった対人環境では、よりさまざまな局面があり、これらが複雑に相入れる中、それぞれの対応がより多様となるも、それにはより寛容であるべきということなのだろう。意識しすぎると気疲れしそうでもある。人間の感覚には個々限界があり、それもダイバーシティであると考えると、ダイバーシティは人間社会にシステムとして広範な許容性を高いレベルで構築し、より多くの人たちがより豊かに生きる空間を実現することとなるのだろう。公私の立場はさらに整理されることになる。

私の世代は、わが国が高度経済成長期にあたり、子供の頃は日々何かと豊かになっていく環境が周りにあった。80年代に入ってこの経済成長に内在した翳りが見え始め、90年代初頭のバブル崩壊にともない、世の中は大きく変わっていく。現在の社会的課題の多くは

1980年代からこの頃に端を発すると感じる。失われた30年、裏を返せば何もしてこなかった30年とも言われる。しかしこの間、理工系の世界ではナノテクノロジーが台頭し、見えなかつたものが見える新たな時代に突入、大きく社会を変えてきた。言うまでもなく科学もそれは常にダイバーシティが基本となり成長がある。

思い起こせば、液晶で学位取得後、民間企業を4年経験し、当時の通産省傘下の国研で研究を再開したのはバブル崩壊直前だった。その頃その企業では、平日夜8時を過ぎてもほとんどの社員が居残って仕事をしていたのを思い出す。やっていた仕事の内容はともあれ、帰れる雰囲気ではなかったように記憶する。今で言う業務効率はあまり意識されていないという時代であったのだろう。その一方、社内で飲み会となれば定時退社が可能であった。社会全体が戦後の流れの中で満たされることが多くなって、その在り方として方向性を見失う、そんな状況と思えば、ダイバーシティ感覚に乏しい時代であったからと妙に領いてしまう。

一方、当時の国研は自由な時間と空間がかなりあった。産業界の研究開発も基礎指向の時代であった。しかし、組織としてはかなり古めで、企業社会とのギャップを感じたのも事実。そんな中、通産省工業技術院傘下の全国15研究所は2000年に統合されて産業技術総合研究所となった。組織は次の時代のダイバーシティに対応するべく、ダイバーシティに逆行する組織作りもある。

現在の私は、国研を定年退職後、歴史の短い、長い2大学で仕事をしてきた。高度経済成長期の流れの余韻と新しい時代の要請が混沌としている感が否めない。とある授業で、「皆さんの多くは企業に就職するという形で社会に飛び出していくと思うが、定年までそこで仕事を続けている自分がイメージできるか？」と学生諸君に聞いたことがある。そのイメージをもっている学生は少なかった。ダイバーシティの時代なのだ。

最近、キャンパス周りの緑豊かな山々を眺めていると、別の景色から別の発想がありうるかこの機会に考えてみようなどと思う。見える景色が違うとそこから見えてくるものも異なるに違いない。